

**いよいよ開幕!**



「Ma Voiture (PORSCHE) (私の車 ホルシェ)」(部分) 1975年/下:(準備完了) 1968年 すべて広島県立美術館蔵

**2026 10.2 fri. ▶▶▶▶▶ 会期中無休 12.6 sun.**

くやま、尾道エフエム放送、FM



<https://www.hpam.jp/museum>



藝術文化推廣基金

主催：広島県立美術館、イズミテクノ、テレビ新広島、中国新聞社 後援：中国放送、広島テレビ、広島ホームテレビ、エフエムふくやま、尾道エフエム放送、FMはつかいち76.1MHz 協賛：広島県信用組合、一般財団法人ケンシン地域振興財団

## 没後 30 年 菅井汲

20 世紀に活躍した画家の中で、国際的に最も高く評価された日本人画家の一人と言われる菅井汲。本展では、菅井がデザイナーとして働いた最初期の作品から、パリで活動を始めたころのマチエール豊かな作品、そして無駄を取り除いた標識のような作品へと、作品を通して菅井の足跡を辿ります。中でも、木枠から外して保管されていた「日本初公開」の作品を展示した会場は、菅井の作品がどのように形作られていったのかをご覧ください初めての機会になるでしょう。

また、菅井の表現にインスピレーションを与え続けた彼の愛車、1973 年式のポルシェカレラ RS も展示し、菅井が命がけで掴もうとしていた表現に迫ります。

### 【プロローグ】

#### デザイナー菅井汲

1941 年～1952 年

菅井は 1937 年、18 歳の時に阪神急行電鉄株式会社（通称 阪急電鉄）に就職し、事業宣伝課でポスターなどを制作するようになる。当初は本名の菅井貞三で作品を発表していたが 1941 年から汲の名を使うようになった。戦時下だけに、作品の表現には様々な制約があったことが窺え、画面に踊る文字も時代の雰囲気を反映したものとなっている。しかし、そうした制約の中で作られたポスターは戦時色が色濃くなってくる 1942 年になっても力強く、のちに制約の中でこそ自由な表現ができると語る菅井の考え方はこの頃の体験にその原点があるのではないかと想像される。

戦後になるとデザインの仕事にも明るくて力強い作風を取り戻し、ポスターを比較すると、海外の新しい美術情報が入手しやすくなり、菅井自身もさまざまな表現を試みている様子が作品を通して見て取れる。その後、デザイン業界を離れ独自の道を歩む菅井だが、画業初期をデザイナーとして過ごしたことは、菅井の表現にとって生涯にわたる財産となったようだ。

※ポスターのみ展示替えを行います。(前期～11/8、後期 11/9～)



[後期展示]  
びわ湖へ はり丸  
毎日就航 行楽の秋には  
1951 年  
公益財団法人  
阪急文化財団 池田文庫



森の番人  
1951 年  
芦屋市立美術博物館

菅井は 1948 年頃から吉原治良に絵を見てもらっていたというが、この作品も女性のシルエットや左右の目の対比など、吉原作品の影響が指摘されている。吉原の影響はさておき、瞳の大きさを非対称に描いていることや、頭上に配置された島といった構図は、菅井の実験的な日本画作品《森の番人》にも通じるものがある。気になるテーマを見つけると異なる仕事の中でも考え続ける菅井のスタイルが表れていると言えるだろう。

## 【第1章】

## 自分自身の表現を求めて

1952年～1967年

菅井が真剣に美術に取り組もうと考えたのは、無断欠勤を繰り返した阪急電鉄を辞めた時で、こんなことをしてはいけない、絵を必死でやろうと決意したのだという。ちょうどそのころ、戦争のあいだ触れることのできなかった海外の美術情報を入手できるようになった。当時、具象に取り組んでいた菅井は自分の仕事に自信を持てなかったという。そんな時、雑誌でジャクソン・ポロックや、カルダーのモビールを見て衝撃を受け、自分で思うように描いてみると、それまで苦しみながらひと月掛かっていた仕事が半日でできた。菅井はその出来に満足したが、評判は良くない。日本の団体展や画壇の評価に疑問を持った菅井は、やがてフランスに留学する。パリに着いて間もなく、菅井の作品は絵肌の調子が豊かで詩的な世界が感じられると評価され、水墨画や書など東洋を意識した表現を追求していく。こうした作品で識者の目を引くようになった菅井は、1954年に名門と呼ばれたクラヴァン画廊で初個展を開き人気作家の仲間入りを果たした。



鬼 1958年 東京都現代美術館

この作品では漢字の形をヒントに菅井がその文字や言葉に抱くイメージを定着しているようだ。翻訳のせいも、フランスで発表された当時の作品名はデビルだったり、ディアブロであったりと、ちょっと恐ろしげだ。しかし菅井によると、彼の描く鬼は恐ろしいものではなく、昔話に出てくるような剽軽で楽しい存在だという。カリグラフィー的と評された土俗的なテーマを取り込み作風に新たな展開を探っている様子が感じられる。

## 【第2章】

### 未来の美術を求めて

1967年～1982年

菅井は「美術ではないところまで逸脱したい」といい、いわば未来の美術を追い求めた。それを実現するには、知恵を絞り技術を尽くして挑む必要がある。資源の集中とでもいうように、画面は増々単純化され、カラフルで力強いものとなっていった。そんな夢に取り組んでいた1967年、交通事故を起こした菅井は、一命はとりとめたものの、人の手を借りなければ制作できない状態になってしまった。そこで菅井はお気に入りの形を基本ユニットとして、これを組み合わせて作画するスタイルを推し進めた。組み合わせて強く、個別でも強い形を工夫し、事故の翌年には、第34回ヴェネツィア・ビエンナーレに10点もの大作を出品し、翌年の1969年には東京国立近代美術館の新館に大壁画《フェスティヴァル・ド・トウキョウ》を設置するなど、新たなスタイルで発表をつづけた。その後もタイトルを縛った「太陽」のシリーズや、同じキューブを出発点としたと思われる「フェスティヴァル」のシリーズなど、表現に制約を設け、その制限の中でイメージを変化させることで、菅井らしい強い個性を発揮していく。



準備完了 1968年 広島県立美術館

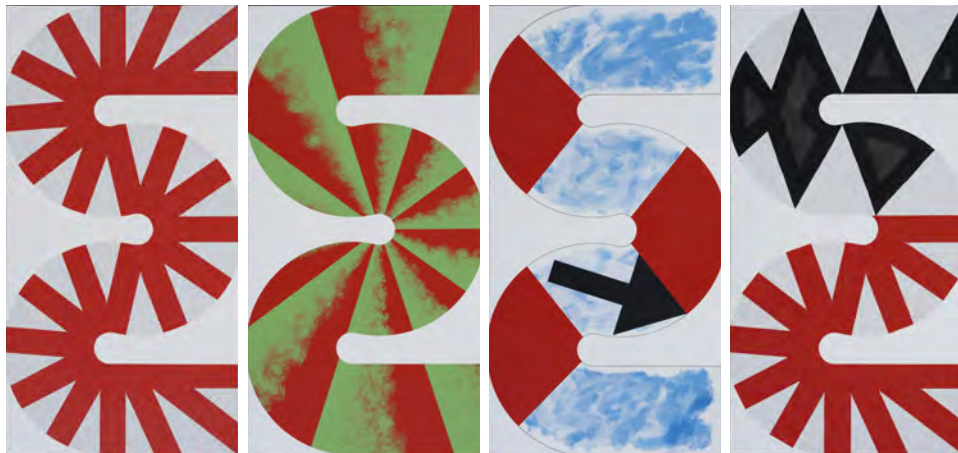
第34回ヴェネツィア・ビエンナーレで菅井コーナーの正面の壁を飾った作品である。菅井資料が当館に収蔵された際、巻き取られたキャンバスが含まれていたが、その中から発見された作品の一つ。3分割された画面の、中央の細長い部分は木枠に張られたまま別資料とされていたため、緑の雲形をヒントに3面が一つながりであることが確認できるまでは《準備完了》と認識されていなかった再発見作品である。本展に合わせて木枠に張り込んだもので日本初公開となる。

### 【第3章】

#### 表現の揺らぎ

1980 年代初頭～1990 年代初頭

10 年以上も平滑な画面に徹していた菅井だが、1980 年代に入ると荒々しいタッチで絵具を盛りつける表現が見られるようになる。未来の美術を模索し、絵肌に注力することを切り捨てた菅井だったが 60 歳を超えた頃から、自分が生きている間に自分自身の手で未来の美術を生み出すという目標にはたどり着けないのではないかと不安を覚えるようになった。それならいっそ今まで我慢してきた絵具で描くという行為を楽しみたいと考えた。加えて S のシリーズへの熱中がその気持ちを加速した。S の形は、もともとはカーブが連続する道路のイメージから抽出した図形で、S のようにも見えることから菅井のイニシャルに因んで S と呼ぶようになった。このシリーズは同じ大きさのキャンバスに（250×132 cm）寸分たがわぬ S 形を描く。一方、描画には絵具のタッチがハッキリと認められる荒々しい表現や、掠れるような絵具使い、あるいは、それまで菅井が使ってこなかった色調の組み合わせを用い、さらに複数枚を一組とする作品にも取り組むなど、自ら課した制約の中で多様な展開を行った。



S.23 S.24 S.25 S.26 1991年 広島県立美術館

Sのシリーズというが、知らない人はまずSとは読まないだろう。MとかWが横を向いているといった方がしっくりくるかもしれない。もともとはカーブが連続する道路のイメージから抽出した図形なのだが、菅井のイニシャルであるSの字のようにも見えることから菅井自身がSと呼ぶようになった。この図形は、決まった大きさのキャンバスに寸分たがわぬS形を守って描かれる。すべて同じシルエットなのだ。変えられるところは図形の内側だけだが、そこにも制約を設け自由を制限している。そのため、一点いってんに違いを与える目的でも、絵肌の違いは一定の役割を果たしたに違いない。

## 【第4章】

### マチエールを排して

1990 年代初頭～1996 年

無駄を省いた表現の追求へ回帰した「カドミウム・レッド」のシリーズは大変力強く、晩年の菅井を代表する作品になった。しかし菅井はこの表現にも留まることをせず、《TAMBOUR（鼓手）》のように画面から響きを感じるような表現を試み、あるいは《S-CERCLES(S サークル)》のように同心円によって動きを感じさせる作品へと新たな表現を探り続けた。残念ながら菅井は1996年、これらの作品を最後に他界した。はたして、彼の手は未来の美術に届いたのだろうか。それは菅井にしか判らないことだが、もしも手が届かなかったのだとしても菅井に後悔はなかったはずだ。なぜなら菅井はいつも未来を向いていたからだ。テレビ番組で菅井にインタビューをしたアナウンサーが、次に取り組むとしたら何をしたいかと問うと、今一番したいことに全力で取り組んでいるのだから、したいことというのは無い、と答えた菅井の思い出を伝えている。まさに菅井らしいエピソードではないだろうか。



Rouge de Cadmium 31.32  
(カドミウム・レッド 31.32)  
1993 年 広島県立美術館

1980 年代には、マチエールの目立つ作品や色数のとても多い作品、あるいはグラデーションの有る作品など、様々な作風を積極的に試していた菅井だが、1990 年代にはいると無駄を省いたスッキリとした表現へと戻ってきた。この作品は全く同じ大きさのキャンバス 2 つを一組の作品として 20 点制作したという。つまりこの「S」から派生した図形が全部で 40 点描かれたことになる。実はこの作品には組み合わせを考えたのであろう写真が残っていて、左右の組み合わせは 40 点の画面が出来上がったのちに考えられたと思われる。

## 【エピローグ】

### 菅井汲という人

さまざまな作品と多くの伝説を残した菅井汲、実際にはどんな人だったのだろうか。毎日同じ食事をとっていた、無類のスピード狂だった、など、エピソードばかりが独り歩きし、制作の背景にある彼の人物像が見えにくくなっている気がする。この章では、彼の残した様々な資料を通して菅井汲という人の素顔を探してみたい。例えば、菅井は描き終わった作品に興味が無いことを明言している。すると筆のオブジェや絵具のチューブを使ったオブジェの存在はどうだろう。言葉通りなら、使い古した筆やチューブはただのゴミとして処分されるのではないだろうか。オブジェをはじめ、他人から見ればガラクタともいえる小物やおもちゃなどを手近において楽しみ、過去に乗ったポルシェのナンバープレートや鍵なども大事に保管しているところは、収集癖のある普通のおじさんといった感じだ。ここではこのように、菅井が最後まで手元に残した様々な資料の一部をご紹介します。そこからはきっと、今まで語られてきた菅井汲とはことなる「菅井さん」の姿が見えてくるのではないだろうか。そして、その人柄こそが、あの力強い作品を生み出してきた背景に違いない。



無題（絵の具の塔）  
1960 年頃 広島県立美術館



無題（筆・白大、筆・黒、筆・白小）  
1960 年 広島県立美術館

菅井がまだマチエールの豊かな作品を描いていたころのオブジェだ。絞り切った絵具のチューブで作ったオブジェ。普通だったらゴミとして捨てられるチューブ殻だが、菅井にとって画材や描画用具は自らの分身のように愛着の籠るものだったようだ。筆も絵具が洗い落とせなくなったものをこうしてオブジェにしている。こうしたのを見ると少しだけ、本当の菅井さんを見つけたような気がしてくるから不思議だ。

press release



【関連イベント】

■ 記念講演会「今、菅井汲を見るために——30年後の未来」

日時:10月3日(土)13:30~15:00 (開場 13:00)

講師:速水 豊 (三重県立美術館館長)

会場:地階講堂

共催:広島県立美術館友の会

※聴講無料 ※要事前申込 (電話 082-221-6246)

■ 美術講座「菅井汲 創作の秘密」

日時:10月24日(土)13:30~14:30 (開場 13:00)

講師:角田 新 (当館担当学芸員)

会場:地階講堂

※聴講無料 ※要事前申込 (電話 082-221-6246)

■ ワークショップ「自然のものを使ってモビールを作ろう」菅井汲の初期作品に挑戦しよう！

日時:11月1日(日)10:30~12:00 (受付 10:00~)

講師:木村 翔太 (彫刻家)

会場:美術館・縮景園

参加費(材料費):500円 ※要本展入館券・入園券

※先着10名(小学生以上)小学生は保護者同伴

※要事前申込 (電話 082-221-6246)

※刃物を使います。汚れてもよい服装で。

➡ 申込みが定員に達しました

■ ギャラリートーク

日時:10月16日(金)、11月6日(金)、11月20日(金) 各日 11:00~、17:00~

会場:3階展示室

講師:当館学芸員

※要入館券 ※事前申込不要

※11月20日 17:00 ~は手話通訳付 (共催:アートと共生に関する調査および施策一体型プロジェクト)

■ インスタライブ

日時:10月6日(火)、10月27日(火)、

11月10日(火)、11月24日(火) 各日 17:00~

講師:当館学芸員



■ ロビーコンサート決定

日時:11月7日(土) 12:00~

出演:森本ケンタ:ギター、森川泰介:パーカッション、RISA:キーボード

会場:1階ロビー

※事前申込不要 着席の場合は、本展のチケット(半券可)をご提示ください。

## 【開催概要】

メインタイトル：没後 30 年 菅井汲

英 語 名：SUGAI Kumi - 30 Years After His Death

会 期：令和 8 年 10 月 2 日（金）～令和 8 年 12 月 6 日（日）

開 館 時 間：9：00～17：00（金曜日は 19：00 まで開館）

※入場は閉館の 30 分前まで ※10 月 2 日は 10:00 開場

※開館情報等に変更の生じる場合がございます。最新情報は広島県立美術館（電話・HP・SNS）まで

料 金：一般 1,500 円 高・大学生 1,000 円 小・中学生 700 円

※前売り・20 名以上の団体は当日料金より 200 円引き

※会期中、本展チケットのご提示（半券可）により、100 円で縮景園にご入園いただけます。

※学生券をご購入・ご入場の際は、学生証のご提示をお願いします。

※身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳及び戦傷病者手帳の所持者と介助者（1 名まで）の当日料金は半額です。手帳を提示してください。

※前売券は、広島県立美術館、セブンチケット（セブン - コード：116-399）、広島市・呉市内の主なプレイガイド、画廊・画材店、ゆめタウン広島、中国新聞読者広報部などで販売しています。

## 開催クレジット

主催：広島県立美術館、イズミテクノ、テレビ新広島、中国新聞社

後援：中国放送、広島テレビ、広島ホームテレビ、エフエムふくやま、尾道エフエム放送、  
FM はつかいち 76.1MHz

協賛：広島県信用組合、一般財団法人ケンシン地域振興財団



公式 SNS はこちらから

問い合わせ先：広島県立美術館

〒730-0014 広島市中区上幟町 2-22

TEL.082-221-6246 FAX.082-223-1444

E-mail：iroeuma2@gmail.com

担当：学芸課 角田 新

広報担当：総務課 一色 直香



## 【媒体掲載用の画像提供について】

※いかなる場合も本プレスリリースからの転用はご遠慮ください。

※都合により出品作品が異なる場合がございます。ご了承ください。

※画像については提供が可能です。掲載の際に画像が必要な場合は、当館へお問い合わせください。

※画像掲載の際には、画像とテキストが掲載されたレイアウト原稿を事前に当館へ提出していただき、

1 週間程度お時間を頂きます。ご了承ください。

※展示室内での筆記具の使用は鉛筆のみお願いします。（ボールペンなど使用不可）